

修士論文(要旨)

2010年7月

韓国人 IT ビジネスパーソン of 異文化間コミュニケーション
— 社会言語学的視点に沿った質的調査から —

指導教員 宮副ウォン裕子 教授

国際学研究科
言語教育専攻
208J4021
渡辺倫弥

目次

第1章	はじめに	
1.1	研究背景	
1.2	日本企業が外国人ビジネスパーソンに求めるもの	2
1.3	研究目的	2
第2章	先行研究	
2.1	外国人ビジネス関係者の接触場面の問題点	4
2.2	実質行動と文法外コミュニケーション能力	4
2.3	話題管理と調整行動	5
2.4	学習環境と学習ストラテジー・スタイル	6
第3章	調査概要	
3.1	調査協力者	7
3.2	調査方法	10
3.3	分析方法	11
第4章	調査データの記述と分析	
4.1	KIBの実質行動とインターアクション	15
4.2	文法外コミュニケーション行動	23
4.3	KIBの言語学習スタイル	41
第5章	総合的考察	
5.1	KIBにおける社会言語的な特徴	48
5.2	異文化接触と社会文化意識	49
5.3	KIBの言語観の変容	52
第6章	おわりに	
6.1	KIBの異文化間コミュニケーション	55
6.2	ビジネス日本語教育への提案	56
6.3	本研究のまとめと今後の課題	56
	参考文献	
	資料	
	謝辞	

【要旨】

第1章 はじめに

近年、日本企業のグローバル化、日本人口の減少などに伴い、日本に在住し、日本企業に勤務する外国人ビジネスパーソンは増加傾向にある。しかし、ビジネスに必要な高度な日本語能力や外国人には理解しにくい日本企業の社会文化的な問題、日本での住環境の確保や人間関係の構築や一生活者としての問題など、外国人ビジネスパーソンを取り巻く問題は多岐にわたっている。これまで稿者が日本語研修で接してきた外国人ビジネスパーソンは、日本語運用力は職務遂行に支障はないレベルに達しながらもコミュニケーションに違和感や問題点を認識し、様々なストラテジーを駆使し自律的に学習していることが見受けられた。そこで、本研究では日本在住の韓国人 IT ビジネスパーソン(以下 KIB)を調査対象に、職場内・外の日本人との接触場面の中で、どのようなインターアクション上の特徴があるかを以下の研究目的に焦点を当て明らかにすることとした。

- ① KIB の文法外コミュニケーションの特徴の一端を明らかにする。
- ② 多言語化する KIB がどのような学習環境と学習スタイルを持ち、どのように変容するか分析・考察する。
- ③ KIB の異文化接触とネットワーク構築の実態調査から、多言語、多文化化した職場での社会文化管理について考察する。

第2章 先行研究

これまでビジネス関係者を対象とした先行研究には近藤(1998)の日本在住の外国人ビジネス関係者の接触場面上の問題点に着目した意識調査、西田(2000)の海外日系企業における日本人駐在員と現地社員との異文化間コミュニケーション摩擦を調査したものなどがある。しかし、いずれも接触場面上の問題点の探求に焦点を当てているため、外国人ビジネス関係者のインターアクションの実態を覆い隠してしまっている。本研究では研究目的①を明らかにするため、ネウストブニー(1982)の文法外コミュニケーション行動の 8 つのルールに沿って、主に社会言語学的な特徴の分析・考察を進める。また、KIB が日本人とのインターアクション上、どのような話題管理や調整行動を使用しているかを明らかにするため、外国人居住者の日本語接触場面における社会文化管理や異文化適応の実態を明らかにした村岡(2002)のインターアクション・インタビューを調査方法に用いデータ収集を行う。研究目的②の学習スタイルの分析には Oxford(1990)の言語学習に用いられる間接ストラテジーを援用し、分析枠組みとし分析、考察を試みた。

第3章 調査概要

本研究では日本 IT 業界への就業目的で、ある一定期間の日本語研修を受け、現在日本在住の韓国人 IT ビジネスパーソン 10 名を調査協力者とした。KIB の日本語接触場面の実態を把握するため、2008 年 11 月から 12 月、一次調査として KIB5 名への半構造インタビュー(村岡 2002)を実施した。ビジネス場面では音声データ収集の倫理的制限があることや、稿者と協力者は日本語研修教室で教師と学習者であった経緯から、ある程度のレポート形成がなされていると考え、KIB の意識を深く掘り下げることができる半構造インタビューを用いた。その録音データを文字化し、そこから特徴的な項目を抽出しさらに分析・考察を深めるため、2009 年 6 月から 7 月、KIB5 名への二次調査を実施した。二次調査では接触場面上の特徴を具体的に引き出すため、インターアクション・インタビュー(村岡 2002)を用いた。

第4章 調査データの記述と分析

調査データの分析から、KIB の職場内、外における実質行動とインターアクションの関連性や文法外コミュニケーションストラテジーの適用が明らかになった。ネウストプニー(1982)の文法外コミュニケーションルールの「バラエティー」「内容」に関連するストラテジーの表出は顕著であった。職場における言語の社会化には、円滑な業務遂行や摩擦回避のためのストラテジーの獲得、場面や参加者への配慮行動の重要性が明確になった。

KIB の日本語学習スタイルについては、メディアやネットワークを効果的に取り入れた、自律的な日本語学習を継続していることが明らかになった。時間的な制約がある KIB は、実際使用場面に即した独自の日本語学習スタイルを選択していると考察される。KIB の日本語学習スタイルは、特定の教室場面に属さない成人日本語学習者の学習継続を考える際に、留意すべき点が集約されていると捉えられる。

第5章 総合的考察

KIB は異言語、異文化接触を通じて、社会文化意識の変容を遂げていることが明らかになった。意識の変容には、異言語、異文化を肯定的に受容し、多言語意識を拡大、または構築するタイプと、母国では認識することのなかった心的葛藤を抱える 2 つのタイプがあり、協力者の異言語、異文化接触体験により個別性が生じていると分析できる。多言語意識を構築させた要因は、異言語、異文化職場での業務遂行が KIB の自己効力感を高めた結果と考察される。

第6章 おわりに

職場の実際使用場面では、これまでのビジネス日本語教育では身につけることが困難な日本語インターアクション能力が求められている。職種や職場環境によって、求められる日本語能力も多様であり、一般化することは難しい。総合的な考察を経て、職場での言語の社会化には、文法外コミュニケーションストラテジーと社会文化管理能力の獲得が肝要であるという点が明らかになった。そのため、今後のビジネス日本語教育には、職場の実践的な日本語インターアクション能力に着目した学習内容を、効果的に設定することが期待される。

【参考文献】

- アンダーソン,B(2007)『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早川
- 梅森直之(2007)『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社書院
- キムキョンソン(2008)「韓国人超上級日本語話者の言語管理－事前調整を中心として－」『言語生成と言語管理の学際的研究－接触場面の言語管理研究 vol.6』千葉大学大学院 人文社会科学研究所研究プロジェクト成果報告書第 198 集
- 近藤彩(1998)「ビジネス上の接触場面における問題点に関する研究－外国人ビジネス関係者を対象にして」『日本語教育』日本語教育学会 97-108
- 近藤彩(2005)「ビジネスにおける異文化間コミュニケーション 日本語での会議は非効率か」『講座 社会言語科学第 1 巻異文化とコミュニケーション』ひつじ書房
- 近藤彩(2007)『日本人と外国人のビジネス・コミュニケーションに関する実証研究』ひつじ書房
- 今千春(2009)「ネットワーク調査方法の再検討－外国人居住者のネットワーク調査から－」『多文化接触場面の言語行動と言語管理－接触場面の言語管理研究 vol.7』千葉大学大学院 人文社会科学研究所研究プロジェクト成果報告書第 218 集
- 清ルミ(1995)「上級日本語ビジネススピールのビジネスコミュニケーション上の支障点－インタビュー調査から教授内容を探る－」『日本語教育 87 号』139-152
- 西田ひろ子(2000)『異文化間コミュニケーション入門』創元社
- 西田ひろ子(2008)『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』風間書房
- ネウストプニー,J.V(1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
- ネウストプニー,J.V(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ネウストプニー,J.V(2002)「インターアクションと日本語教育－今何が求められているか」『日本語教育 112 号』1-14 日本語教育学会
- ネウストプニー,J.V(2002a)「インターアクションと日本語教育－今何を求められているか」『日本語教育学会』112 号 pp.1-14
- ネウストプニー,J.V 宮崎里司(2002)『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育に携わる人のために』くろしお出版
- 林さと子他(2006)『ことばを学ぶ一人ひとりを理解する第二言語学習と個別性』春風社
- ファン,S,K(1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語管理」『社会言語学科』第 2 巻 第 1 号くろしお出版 87-95
- 細川英雄(2006)「「社会文化能力」から「文化リテラシー」へ日本語教育における「文化」とその教育をめぐる」『リテラシーズ 2－ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版
- 宮副ウオン裕子(2003)「多言語職場の同僚たちは何を伝えあったか－仕事関連外話における会話上の交渉－」『接触場面と日本語教育－ネウストプニーのインパクト』明治書院
- 宮副ウオン裕子他(2003)「カンバセーション・パートナー・プログラムの参加者は何を学びあったか－中部大学生と香港理工大生の双方向的学習の調査と分析－」『留学生教育学』8 号
- 村岡英裕(2002)「接触場面における社会文化管理プロセス－異文化の中で暮らすとはどのようなことか－」『日本語教育の新たな文脈－学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性』アルク
- 山川智子(2007)「『複数言語主義・使用・状況』の可能性 欧州評議会の動向とヨーロッパ・スクールの試み」『リテラシーズ 3－ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版
- Rubin.J(1999)「学習者ストラテジーの教授」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』宮崎里司 J.V ネウストプニー共編 くろしお出版